

ソード・ワールドRPG

サイランド・サガ

Siland Saga

ダイジェスト・リプレイ

『迷惑な蚊』

ACRAP・編
シナリオ作 海保
リプレイ著 海保

目次

目次	2
まえがき	3
キャラクター紹介	4
冒険の舞台	6
本編	7
第 1 章 ハイドン！太る！。	7
第 2 章 ハイドンとウェイク！慌てる！	11
第 3 章 シリス！助ける！	16
第 4 章 ハイドン！躊躇なし！	18
第 5 章 ハイドン！血も涙もなし！	21
第 6 章 メルララ！必死！	23
第 7 章 ウェイク！ボロボロ！	26
第 8 章 少女！強引！	27
第 9 章 デラッツィ！哀れ！	29
第 10 章 崩壊！トコロザ・・・	32
（おまけ小説）キトとロッソ＜前編＞	33
あとがき	37

まえがき

お待たせしていない(と思う)けど、サイランド・サガ第3部「迷惑な蚊」です。

前回の第2部は予想以上にサクサクと書けて、実質1時間で完成してしまったのでこの第3部も恐らく大して時間かからずに完成するでしょう。このやり方ならうまくいきそうだし、うむうむ。生産効率を上げるためにはダラダラとボトムアップで長々と書くのもいいけど、トップダウンで設計・作成していくと生産効率が段違いというのは、ソフトウェア開発の世界では証明されつつあります。まあ実際にはまだまだで、どうしても体力とかで補ってしまう場合も多いんだけど、下流工程(プログラミング)は技術的に明確な事が多いのでわかりやすいし、体力で何とかできるけど、上流工程は方法論があるわけでもないし、ユーザーサイドが効率よくやろうという意識がないからね。あいつら適当に喋ってればソフトウェアができると思っていやがる。

閑話休題。(ハイドンの中の人の真似)

本編中でも何度か触れていますが、第2部と今回の第3部の間には「外伝」が入っています。私がマスターをやっていないのでリプレイを作成するつもりは欠片もないです。マスターをやったのはハイドン中の人、で急遽ソード・ワールドの既成シナリオ「石巨人の迷宮」をやりました。ロッソが久しぶりにNPCじゃなくなった、メルララが加わった冒険である、位は覚えておいてください。

まあ前回はホンマ序章って感じで今作から本編が始まるような感じですが、某ゲームのようなシチュエーションになり、誰もが知っているあのキャラが登場です。

それでは、始めます。

キャラクター紹介

・ハイドン(人間、ファイター&レンジャー、♂)



人間なのだが、サイコロの目による異様な器用・敏捷・知力の低さにより外見中身ともにドワーフとしか思えない。ドワーフに見えてドワーフにあらず！その正体は人間！でもドワーフと言われると怒る。

豪斧「カチ割り丸」を携えて敵を片っ端からカチ割る。その姿まさに重戦車。しかし、そんな彼でもあの数の〇〇〇は相手にできまいよ。

・メルララ(エルフ、レンジャー&シャーマン&バード、♀)



実質この前のセッションで行われた外伝より参加した。ということになっている。この外伝はトコロザを舞台として行われたため、トコロザに住んでいる事に半ば強引に決定した。後から考えると少々無理があった気がしないでもない。ガットウーゾが住んでいる事にすればよかったのではないかな。

レンジャーと言う事で射手。なので、ハイドンと同じくLOTRの物語からの引継ぎが行われるが、それは本編で。

・ガットウーゾ¹(ハーフエルフ、ソーサラー&ファイター、♂)

NOW
PRINTING

サイランド・サガ初登場のM枝氏のキャラクター。以前のLOTRではゴルブラス役を演じていた。相変わらずの存在感を醸し出している。今回では魔法戦士らしいのでそれなりに活躍できるようなできないような感じである。

導入に困ったので半ば強引にメルララの従者としてパーティーに参加、というか巻き込まれた。

・ウェイク(人間、プリースト&ファイター、♂)



前回マスターであったI氏がプレイヤーとして参加。チャ・ザのプリーストとして第2部でジャンドルフに代わって登場。チャ・ザのプリーストらしくない、あんまり。というかそもそもロールプレイしているかも怪しい。口癖は「だぜえ。」だが、あまりに無理やりすぎて涙を誘う、だぜえ。

興奮すると他のプレイヤーの言葉を奪うという悪癖があり、リプレイを書いていて時々困る。お前じゃなくて他の人に喋って欲しいんだよ！

¹ 元ネタ。ジェンナーロ・イヴァン・ガットウーゾ。セリエ A、AC ミラン所属のイタリア代表のサッカー選手。ポジションはMF。ピッチを縦横無尽に走り回り、ボールを奪いにいく中盤の要のプレイヤー。ハードワーカーの代表格である。愛称は「リンギオ(狂犬)」「うなり屋」。「ガットウーゾ襲い掛かる」という言葉は有名。2006 年 W 杯でのイタリア優勝は彼の力があってこそだろう。女性ファンが多いイタリア代表の中でダントツの男性ファン数を誇る(Wikipedia)このとき、ちょうど 2006FIFA ワールドカップが終了した時だったんだな。

・ロッソ(ハーフエルフ、シャーマン&シーフ、♂)



人間の年に直して 19 歳だが、記憶喪失で 2 年前以前の記憶が無い。トレジャーハンターとして生計を立てている。シーフ&シャーマンのハーフエルフの熱血漢。赤く(ロッソ=イタリア語で「赤」)て早い。

物語の主人公として最有力だったがプレイヤーである私がマスターになったため、自動的にNPCとなった。位置づけ的にはクワトロ・バジーナ²と思ってくれば早い。

(画像はイメージです)

・キト=バミアン(エルフ、ヒーラー&シャーマン&ソーサラー&セージ、♂) 今回は欠席



名前をそれぞれ反対に読むと、性格おのずと知るべし。最高の木偶(デク)を作る事に命をかけている。が、マスターの力不足もありその設定を中々活かさなくて困っている。いわゆる「設定をもてあます」という状態になりつつある。能力値がエリートで特に敏捷度は人間では最高の 24 になる。ちなみに続けて読むとヒー！ジャーマンソーセージ。

今回は欠席したので、ロッソと共に所用を片付けるという事にしてある。

・シリス(人間、ファイター&プリースト、♀) –NPC



今回から登場のNPC。ハイドン達の窮地を救い、そのまま合流してトロロザを脱出する。この第3部では謎の神官戦士として(もっぱら回復に)活躍するが、正体が何者かは不明。ただ一つこれだけは言える。こいつはツンデレだ！

(画像は知的財産権とマスターの人格と趣味の保護のためモザイクをかけさせていただきました。)

² 機動戦士Zガンダムより。クワトロ・バジーナ=シャア・アズナブル、カミーユのよき先輩として、また自身も優秀なMSパイロットとして活躍。赤とか金色とか。ちなみに百式のコンセプトは「百年使えるMS」だが、F91の時代に百式は使われていないのでやっぱダメだった。

冒険の舞台

この物語の舞台はアレクラスト大陸ではなく、フォーセリア西方のサイランドという国である。



冒険者達はリンド村の遺跡から謎のプレートを発掘した。その後、クッキ市にてこのプレートの調査を行っていたが、調査結果は芳しくなく、結局何なのかはわからないままであった。(第1部)

そんな折、ロツソがプレートを持って失踪、一行はアウラ川を下り、ハンノー市近郊の遺跡まで追跡する。調査隊は既に遺跡の調査をしていたが、謎の敵によって皆殺害されていた。数々の障害(シオマネキー族とか小鳥なガーゴイルとか)を乗り越え、ついに遺跡の最深部に辿り着く一行。そこには古代魔法時代に作られた遺伝子操作装置があり、敵であるジナス、コノハがロツソを捕らえ、一行を待ち受けていた。ハイドンの豪斧「カチ割り丸」が吼え、ジナスを撃破すると遺跡は崩壊を始め、後にはクレーターしか残らなかった。(第2部)

クレーターの謎を問われる前にと一行はトコロザ市に逃れる。ここでエルフの射手メルララと出会い、共にジェスレン少年を救うため、「石巨人の迷宮」に潜入する。最後にはフェニックスの力でジェスレンの父親を蘇生させ、冒険は終了した。(外伝)

そのままトコロザ市に滞在する一行。ここから物語は始まる……

本編

第1章 ハイドン！太る！。

<トコロザの町>

ネイル王国南のトコロザの町は南方のトッキョ荒地の少数民族との交易を中心として栄えてきた街である。この周辺にはトコロザしかないために、栄えている。人口 5000 人、3km×1.5km 程度の規模であり、通常の店は贅沢言わなければ普通にあり、休日には市場が開催されている。現在は少数民族とも友好関係にあり、積極的に交易が行われているためである。

しかし少数民族との戦いが長く続いた事からトコロザ街は非常に防御力が高い。具体的には街は高さ 15 メートルの塀で覆われており、入り口は北と南の門のみとなっている。

更に、3 代前の領主によって市内の下水が完備され、街を下水道が巡回している。これらの下水道は水道局によって管理されている。このため、トイレは水洗である。

(ちなみに今作である第 3 部と第 2 部の間には外伝があり、エルフの吟遊詩人・射手メルララが仲間に入っている。)

マスター「さて、前回(正確には前々回)アウラ川にクレーターができたということは、かなり大きなニュースになっている。もちろん原因は君らなんだが」

ウェイク「でも、バレていないよね？」

マスター「西ネイル全域にこの話が広がり、誰がやったんだろう、と噂になっている。」

ウェイク「自然災害ということにはなっていないの？」

マスター「そんなうまい事いくかい！で、今トコロザなんだがメルララはトコロザに住んでいたということになり、みんなはトコロザの『猫の額』に滞在し、無聊を困っている。メルララが毎日遊びに来ている。」

メルララ「じゃあ、私は早速先日完成した『ロツソの悲劇』を歌っているよ。私と、う、ぞ、く、ロ～ッソ…³」

ウェイク「そっちかよ！」

マスター「でメルララは(エルフなんだけど)この街に何故か家があり、何故か金持ちで、何故か召使いがいて、それがガットウーゾ。」

メルララ「何！？所持金63ガメルしかないんだけど」

マスター「浮世離れしているというところで。」

ハイドン「従者が一杯持っているんだろ。」

マスター「で、ガットウーゾはメルララと一緒にいる。ってことで。ちなみにロツソとキトも一緒にいて無聊を困っているよ」

³ ギター侍かよ！現在は一時期よりは仕事が減っており一発屋芸人に数えられる(2005 年 9 月を持って「エンタの神様」を降板したが、降板理由は未だ謎のままとなっており、度々放送されている同番組の総集編でも放送されていない)。島田紳助を「働き過ぎですから～!!」と斬ったところ、「あんたはもう直ぐ休める様になりますから～!!残念!!」と斬り返され、現実のものとなってしまった(とはいえ、紳助司会の「クイズ!ヘキサゴン II」にはレギュラーで出ているため、同じく一発屋芸人のダンディ坂野などよりは健闘している)。(wikipedia)

ハイドン「でも裏切ったんだ。ロッソには俺まだ心許していないから(笑)⁴」
ガットウーゾ「俺も許していないから」
ウェイク「お前は会った事ないだろ！(笑)」
マスター「で話を戻すと、クレーターの件について国家権力が動いているらしい」
ハイドン「足はつきそうなの？」
マスター「つきそうだね、魔法があるから。多分…さてと、ハイドンとウェイクは何をしている？」
ウェイク「ハイドンは—」
ハイドン「何で俺のことをお前が決めるんだよ！？しらねえよ、お前自分の事を喋れよ⁵」
マスター「まあそこそこ大きい街だから大抵の店はあるよ。毎日酒を飲んでもいいし」
ハイドン「毎日ポカンとしている」
ウェイク「…チャ・ザの教会に面通しておく」
マスター「うむ、さてと、君たちが一緒に歩いていると—一緒に歩いていることにしておいてくれ—ロールしてくれ」

この結果ハイドンが…

マスター「ハイドン、何者かに追けられている。」
ハイドン「ウェイク、そのまま聞け。追けられている」
ウェイク「ガビーン！いつからだ？」
ハイドン「わからん。今気づいた」
メルラ「気づかれたのがわかるかロールする。」
ハイドン「お前かよ！」
マスター「…今のツッコミのタイミング絶妙だったなあ(笑)」
ハイドン「今はどこに向かっているの？宿？」
マスター「そうだな。」
ウェイク「まくか？」
ハイドン「いや、次の曲がり角で待ち伏せよう。」
ウェイク「了解。フォーメーションAで！」
マスター「……(じゃあ相手が気がつくかロール)何者かはつけてこなくなった……」
ハイドン「あ、そう。計算が狂ったか」
ウェイク「後ろめたい事は何もないのになあ……」
ハイドン「何もないのかなあ……(笑)、と考えながら宿に帰る。」

謎の尾行があり、翌日ハイドンたちの宿泊している『猫の額』邸に恰幅のよい、身なりのよい男とその従者と思われる1団十人が訪れる。これは東ネイル遺跡調査隊のモクレンという男であった。モクレンは世間で大騒ぎになっている「クレーターができちゃった事件」(ちゃんとした名前をつければよかった orz)についてハイドン達に話を聞きに来たのであった。モクレンとしては、純粋に何が起こったのかを知りたいのである。

モクレンはトコロザ商業組合長キンカイの屋敷に滞在しており、ハイドン達はそこに訪れる(ハイドン「まあ、疑う理由もないし、行ってみるか」)ことにした。

⁴ 面倒なので脚注に書くが、前回の騒動の火種となったプレートは現在ハイドンが持っている。第2部にて、ロッソはこのプレートを持ち、逃亡した。もちろん事情はあったんだけどね。

⁵ ハイドン半切れ。ウェイクの中の人はこちらの方がダメなところなんだよなあ、としみじみと感じ入っている。

この時、ロツソはトコロザのキンカイに面が割れていることからさりげなくここで離脱。ちなみに、離脱する時にキトを連れて行ってしまった。(この二人⁶に今後何があったかは、(おまけ小説)キトとロツソ<前編>にて。)結果、ハイドン、ウェイク、メルララ、ガットウーゾはキンカイ邸に向かった。

マスター「ちょうど夕食に歓待される感じでお邪魔することになるのだがー」
キンカイ「おお、貴方があの有名なハイドン様とそのご一行ですか。どうぞどうぞ」
メルララ「近所のメルララです。こちらは従者のガットウーザ」
ガットウーゾ「ガットウーゾ(笑)」
キンカイ「メルララ様もいらっしゃったんですね。どうぞどうぞ」
マスター「で、もう宴会のようになっている。君たちは上座に案内され、そこで話をしたのだが、ノリ的には殆ど帰ってきた英雄扱い。武勇伝を聞かせている」
メルララ「ぶゆうでんでんでん…⁷」
ウェイク「まさかねえ…あそこで飛び降りるとはねえ…⁸」
マスター「さて、特に酒が嫌いとなっていないキャラクターはしこたま飲みました。」
ウェイク「全く、羽振りのいいことだ。」
マスター「さてキンカイ、モクレンと話していてあまり邪悪な(というか何かを企んでいる)ような感じはしない」
キンカイ「いやいや、こんな優秀な冒険者の話を聞けるなんてもう！ワクワクですわ！ワクワクですわって変だけど」
ハイドン「豚だ…心の中で思ってるだけ(笑)」
マスター「まあともかく、君たちの事が相当気に入り、楽しがっているので酒も食べ物も女も好きだけー」
ハイドン「女も！？(凄い食いつき)」
マスター「もちろん。金も武器も女もーああ、武器はないな(笑)」

その後、よくわからないまま宴会はめちゃくちゃになり、メルララとガットウーゾは家に帰った。ハイドンはキンカイ邸に宿泊したが…

ハイドン「俺は泊まってくが、お前はどうするのだ？」
ウェイク「俺は宿屋に荷物を残しているので、帰るわ。そう言えばプレートが気になるし。」
メルララ「プレートが盗まれてから冒険が始まるんじゃないか？(笑)」
ハイドン「今度はお前が盗むんだろ？名前忘れたけど(笑)」
ウェイク「ウェイクだよ！(笑)前後不覚じゃねえか！」

プレートは結局ハイドンが持つことになった。そのまま宿泊するが、ウェイクは宿に戻る。翌朝(というか昼)になり、キンカイ邸にウェイクが迎えに来た。

ハイドン「迎え？」
キンカイ「いやいやいや、是非お昼も食べていってくださいよ！」
ハイドン「その前に朝飯が欲しいのだが」

⁶ キトは今回中の人(人)が欠席したので、ここで離脱させて、自然に話を進める。

⁷ 紛れてしまい、その場ではわからなかったんだが、メルララは「オリエンタルラジオ」(芸人)を連想していたのだな。もー、また Wikipedia の出番だよ…

⁸ 飛び降りたっけ？

キンカイ「もう日も高うございます。お昼を一緒に…」
マスター「と、また豪勢なお昼がこれでもかといばかりに出てくる。」
ウェイク「ハイドン！ 次の目的地も決めようぜ。」
ハイドン「じゃあ俺が決めてやるよ。次の目的地は北だ！ クマガイア」
ウェイク「熊谷？」
ハイドン「クマガイア！！⁹」
キンカイ「いやいや、せっかくだからこの街にしばらくいてくださいよ」
ウェイク「しかし、我々は冒険者だから…」
キンカイ「しかし、しばし羽を休める場所も必要ですよ。ではまた夜に」
ハイドン「うむ！（笑）」

などと、必要以上の歓待を受け、いい感じになってしまっているハイドン。ウェイクは頑張っているが、金と女性と豪勢な食事の誘惑に陥落するのは時間の問題だろう(マスター談)。しかしこの時、プレートを持ったハイドンが意識を失った。

地下遺跡に潜入する小さい男
小瓶を持って出てくる男
虫が放たれる…

これは明らかに後の事件の予兆であり、これによって第2部のロツソも失踪したのである。しかし、飲みすぎのハイドンは正しく判断できず、そのまま寝てしまった(笑)

翌日、またしてもキンカイが誘いに来る、何のかんのかといくるめられて、結局食事、飲み、泥酔、睡眠とヘビーローテーションを繰り返す。ウェイクは必死に抵抗し、冒険の計画などを立案しているが、またしても酒を飲み続け、夜になってしまった(笑)
(ハイドン「なんか太っちゃった(笑)」)

ちなみに、この日、いやに虫に刺された市民が多かった…

このようにして、日常は過ぎてゆく…

マスター「その夜、メルララ、夢！」
ハイドン「イメージが、手に入るぞ」
メルララ「(サイコロを振る)見た。魔法が手に入った(笑)」
マスター「魔法カード！？」
メルララ「魔法カードが見つかってないんだよ。地縁カードはあるんだけどねえ(笑)¹⁰」

⁹ 元ネタは埼玉県熊谷市。絵はシンボルキャラクター。うわー…



(あついぞ！熊谷©熊谷市)

¹⁰ TRPG「ファールーズトゥロード」より。このルールでは睡眠時に一定の確率で夢を見る。これによって、魔法カー

<メルララの夢>

悪夢である。ゾンビの群れに武器もなく、追われている。

光に包まれて何も見えなくなると一人のホビットが立っている

(ハイドン「ホビット！？」)

(マスター「ああ、ホビットって言っちゃいけないんだ。''」)

その小さい人はニコニコしながら一本の弓をメルララに差し出す

メルララが受け取る

マスター「そこで目が覚める」

メルララ「何この弓は？」

マスター「その通り。枕元には弓がある」

メルララ「またおじちゃんがプレゼントしてくれたのね。これで魔法の武器3つめ(笑)¹²」

マスター「で、外が騒がしい。ちなみにこれはハイドンとウェイクも一緒。」

ここから事件が始まる。のだが、この時点で一行はハイドン、ウェイク組とメルララ、ガットウーゾ組に分かれている。そこで、公正なるジャンケンの結果、ハイドン・ウェイクの側から始まる。

マスター「ドンドンドンドン、ガタガタガタ、(キンカイ邸)君たちが寝ている部屋が激しくノックされた。」

ウェイク「何だ？何の騒ぎだ！？ノックくらいしろよ！」

ハイドン「してるじゃん(笑)じゃあ開けてみるよ」

？？？「脳みそ食わせろ~~~~~っ！」

マスター「という言葉と共にゾンビが襲ってきました」

ハイドン「なぬ————ツ！！！！」

第2章 ハイドンとウェイク！慌てる！

ハイドンはうっかり扉をあけてしまったばかりにゾンビに襲われてしまった。このパターンでは、ホラー映画だったら真っ先に死んでいるパターン。ハイドンみたいなタフガイは大体最後から3番目くらいに死ぬんだけどなあ……

とはいえ、ゾンビにとって不運な事(そしてハイドンにとってラッキーな事)は並の人間ではなかつ

ドを入手し、これを使うことによって魔法を習得する。入手する魔法カードはランダムなので、キャラクターがどのような魔法を習得する事は予測・制御できない。他にもファーローズトゥロードには生い立ちによる技の習得などキャラクター育成のランダム性が高いのが特徴である。地縁カードはなんだったけ？ちなみに、この段階でメルララの中の人は魔法カードを搜索中。

¹¹ LOTRで有名になったホビットという言葉だが、これは原作者J・R・R・トールキン氏の創作した種族であるため、許可なしに使用する事は一応不可になっている。ホビットのような種族を登場させたい場合はD&Dなどでは「ハープリング」という名前になっている。ソードワールドでは「グラスランナー」がこれにあたる。LOTRは実は権利とか知的財産権に厳しいぞ！恐らく前のLOTRのリプレイも本人に見せたら速攻アウトだろう。商売するつもりないから大丈夫だろうけどさ

¹² この前の外伝にて入手。魔法の弓と剣をメルララは入手していた。『石巨人の迷宮』という既成シナリオなのでこちらから制御できないのは仕方ない

たことだ。

マスター「と言う事で不意打ちね。避けて」

ハイドン「俺もしかして裸？今？」

マスター「寝ている時に鎧をつけているわけではないだろうからなあ……」

ハイドン「葉っぱは？¹³」

マスター「葉っぱはいいよ。つけてて。で、葉っぱ、葉っぱ……」

(ガットウーゾ「魔法の葉っぱ+1(笑)」)

ハイドンは葉っぱだか肉体だかによってダメージこそ受けなかったが、組み付かれてハイドンの脳みそを食べようとしているんだけどどうしたらいい？

ハイドン「ぶん殴る。」

マスター「ふっ飛んだ。で、更にもう1匹のゾンビが「脳みそ食わせろ〜〜〜っ！」と襲い掛かってきた。」

ハイドン「蹴り飛ばす！」

ハイドンはもう1匹のゾンビを蹴り飛ばし、これもふっ飛ばした。

マスター「ゾンビは頭半分ふっ飛んで、首とかもげかけているんだが……立ち上がってまた襲い掛かってこようとしている」

ハイドン「(ウェイク)お前何とかしろよ！」

ウェイク「だってオレが何かする前にハイドン一人で暴れてるんだもん。武器も持ってきていないし……」

(ガットウーゾ「おとなしくゾンビに脳みそ突き出しちゃえ(笑)」)

マスター「……まあ、武器防具だけは携帯していた事にしてもいいよ」

ウェイク「ハイドン！これを使え！カチ割り丸だ！」

ハイドン「おう！でゾンビを粉砕する」

マスター「OK。粉砕した。ところが、気がつくところかしこで「脳みそ食わせろ〜！」という声が聞こえる。」

ウェイク「なんだかよくわからないけど長いは無用だ！ハイドン逃げるぞ！」

ハイドン「どこへ！？」

ウェイク「とりあえず外に逃げよう！」

ハイドン「わかったあ！」

マスター「ちなみに、これは(メルララ、ガットウーゾ)君らも事情は一緒！」

場面はここでメルララになる。ガットウーゾは従者の部屋にいたため、厳密にはメルララと一緒にではない。メルララは女性だから、ゾンビ相手なら結構善戦するだろう、これがジェイソンのような殺人鬼なら即座に死亡しているはず。メルララがボインなら生き残る確率は更に上昇する。場合によっては最後まで。

一方ガットウーゾは従者だし、知性系(魔法使い)だから最初の死者ほぼ確定。ちなみに、ガットウーゾが童貞なら何とか切り抜けて最後まで生き残るのは確定。¹⁴

¹³ 裸に葉っぱはLOTRでのフドーリンでのネタ。

¹⁴ こころへのマスターの戯言は全てホラー映画の鉄則である。

マスター「メルラの寝室にゾンビが同じようなノリで強襲してくる」

ウェイク「しかしそれはガットウーゾだった」

メルラ「ガットウーゾ-----ッ！」

ガットウーゾ「うううううおおおお（笑）」

ハイドン「早！（笑）」

メルラ「やられたのか！でも、家の人はいるでしょ」

マスター「で、家の人はいるけれど、君の傍仕えの女性のメイドは真っ先にゾンビになっていて、襲撃してきた。「ご主人様あ！脳みそ食わせてくださいよお〜！」」

メルラ「私の脳みそはおいしいかも知れないけど、食べさせてあげない！」

ガットウーゾ「そうだ！俺が予約してるんだ！」

マスター「言葉はいいから行動に移せ」

メルラ「逃げる（笑）」

メルラは弓矢を取り、『ウィルオウisp』¹⁵を唱える。これで明かりを確保する事に成功し（メルラ「よく考えたらエルフだから夜目が効くから意味なかったね（笑）」）、そのまま逃亡する。一方ガットウーゾだが

マスター「さてガットウーゾだが、君のいた従者の部屋は5, 6匹のゾンビがいる状況。立ち向かうものなら早々に仲間入りだよ」

ガットウーゾ「やばいじゃん！ちょっとやばいじゃん。もう仲間になるのか。魔法を唱えていいのかな？」

マスター「いいよ」

ガットウーゾ「『ライトニング』¹⁶！家壊れちゃうけどいいのかな？」

メルラ「修理は給金から引いておくから（笑）」

マスター「まあ、修理も何もゾンビのせいで家はめちゃくちゃだから」

このようにしてそれぞれ窮地を脱した。多分・・・、でめんどいのでメルラとガットウーゾは合流。

ガットウーゾ「ご無事でしたか！」

メルラ「よかった、ゾンビになっていなくて。」

場面は再びハイドンとウェイクに戻り、二人はキンカイ邸からの脱出を試みる。地図は以下の通り。

¹⁵ 精霊魔法。光の精霊を呼び出す魔法。明るくてよくわからないが光る鳥らしい。術者の意思に従って、自律して動くため、手を使わない明かりとして便利である。

¹⁶ 稲妻の魔法。指定した直線に稲妻を走らせる。ちなみに、この直線の始点、終点は術者の意思で射程内の任意の場所となる。グレートマジンガーのサンダーブレイクのように指から放たれるよりも使い勝手は良い。魔法使い（ソーサラー）の中級の呪文だが、なぜかガットウーゾは覚えていた。後からどうかと思ったが、このライトニングがなければゾンビ化していたと思うと仕方ない。



サンダーブレイク by グレートマジンガー

(図 1 キンカイ邸平面図)

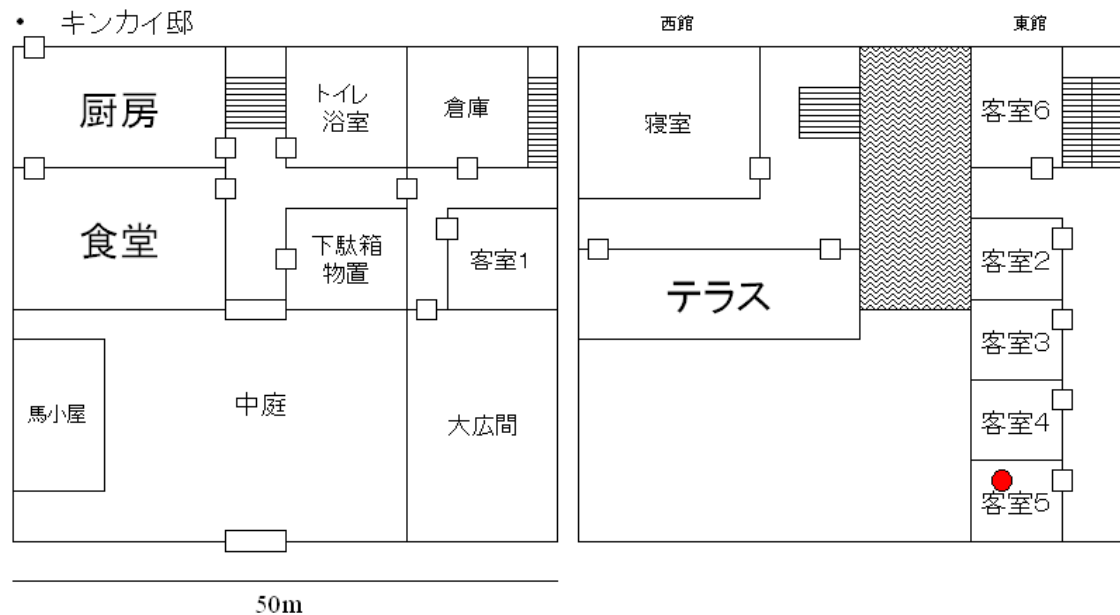


図 1 キンカイ邸平面図

マスター「館は西館(本館)と東館(別館)に別れています。」
 ハイドン「じゃあ、とりあえず階段をおりなきゃな」
 ウェイク「地上に出ようぜ」
 マスター「降りていきたいのは山々なんだが、客室3を通り過ぎたあたりでドアが開いて中からゾンビ」
 ゾンビ「うああうあおうあおあああ」
 (ガットウーゾ「バイオハザードで言うとドッキリする瞬間だな」)
 (マスター「そうそう」)
 ハイドン「いや、警戒しているから、出てきた瞬間頭カチ割るよ。」
 マスター「まあそうだな。ゾンビ2、3匹程度ならどうとでもなっているからハシヨるよ。(もっとも、10匹超えるとわからんがね。)カチ割った」
 ウェイク「ハイドンこっちだ！急げ！」
 ハイドン「言われんでも！しかし、一体どうなってやがるんだ、この街は！」
 ウェイク「家中ゾンビだらけだぜ！」
 マスター「そうそう、そんな感じ感じ。」
 ハイドン「これがゾンビか。そういえば、聞いた事がある・・・」
 マスター「そんな、雷電技能¹⁷使わなくていいから(笑)で、階段を下りたよ。」

¹⁷ 通常、ソードワールドではモンスターに遭遇した時はその名称、能力などをセージ技能を用いて(成功すれば)知る事が出来る。セージ技能の高いキャラクターは物知りということだね。ちなみに『魁！男塾！』で一番セージ技能が高いのは三面拳は雷電。「むう・・・あの技は・・・」「知っているのか雷電！？」はきわめて有名

ハイドン達がいたのは東館の奥であり、脱出するためには一度 1 階に降り、西館の正面玄関から外に出る必要がある。東館から直接外に出ることは出来ない。

ハイドンが壁を壊す選択肢もあったが、結局ハイドンとウェイクは、群がるゾンビを押しつけて正面玄関から出ようと、廊下を進む

ハイドン「どけどけーい、どけどけどけーい！（笑）」

ウェイク「んだバカヤロ、コニャロオメエ！¹⁸」

しかし、正面玄関には……

マスター「(正面玄関の扉は)ダンダンダンと、ひたすらドアを叩く音がしている。ゾンビが殺到しているようだ。」

ハイドン「やばい！ここはダメだあ！」

ウェイク「ハイドンどうするよ！こっちか！？こっちか！？」

ハイドン「絵が汚くてよくわからん！（笑）¹⁹」

ウェイク「2階にいつちまうと逃げられなくなるぞ！こっちは？トイレ？窓はある？じゃあ窓から逃げるぞ！」

ハイドン「そうしよう！どけどけーい、どけどけどけーい！！（笑）」

マスター「で、トイレなんだが、既に先客がいる。で、どうやら泥酔して水風呂に浸かり、そのまま死んでしまった客のようだ。ゾンビではない。」

ハイドン「何だそりゃ？アホか！？」

一応これはゾンビ対策のヒントとして出したものなのだがなあ……一行が気がつくのは相当後になっての話である。

ウェイク「とりあえず窓から出よう！俺は抜けられるけどハイドンお前太ったから出られないんじゃないか？」

マスター「で、出るのは常識的に考えて無理。せまい。」

ウェイク「ダメじゃないかここじゃあ！！（笑）」

(ガットウーゾ「死体を調べろ、死体を調べるんだあ！」

ハイドン「じゃあ、死体を調べる」

ウェイク「お前なにしてるんだ？（笑）」

マスター「と言っている間に外、および他の部屋では「食わせろ」「ぎゃあ」「食わせろ」「ぎゃあ」という悲鳴が聞こえ続けている。」

ハイドン「死体は？(ロールする)」

マスター「えーと、飲み食いしまくって不注意で死んで水ぶくれしたただのおっさん(笑)」

ウェイク「じゃあ、後この部屋は？」



¹⁸ 「いつもここから」のネタだね。「いつもここから」と言えば「悲しいとき」で有名だがこの暴走族ネタはこの後。ちなみに個人的にこの手のシチュエーション系ネタは面白く感じない。いや、共感はあるんだけどそれ単独でネタとしては笑えないよなあ。みんなもそう思わない？思わないか……orz

¹⁹ マスターが手書きで書いた館の地図が汚い、とさ。

マスター「まあ、入った事はないんだけど、メイドがこの部屋から料理を持って出入りしている事からー」

ウェイク「厨房か！厨房か！」

ハイドン「メイド喫茶！²⁰ゾンビが48人出てくる」

マスター「鍵がかかっている……が、ロールしてくれ。聞き耳だ」

この結果、ウェイクが厨房の中から人の声を聞く

マスター「「ついにゾンビが来たわ！」「もうダメよ！」という普通の人の声が聞こえる！」

ウェイク「中から姉ちゃんの声が聞こえるぞ、まだ生きているみたいだ！」

ハイドン「じゃあ話しかけた方がいいんだな。俺はゾンビじゃない！開けてくれ！！」

マスター「しばらく待つと、ドアが開いてメイドが「早くこちらへ！」と言われ、中に入り、ドアは閉められた。パタン！」

ウェイク「早くカギを開めて！カーテンも！²¹」

マスター「……(だから、お前のセリフじゃないだろう)で、扉をバリケード状態にしたが、勝手口がある」

ハイドン「中にいるのは誰？」

マスター「メイドが3人。「貴方達は……ハイドン様ですね。あ～、よかった」」

ハイドン「君達はかしまし娘？²²」

マスター「えーっと、ナターシャ、アリー、エレンの3人のかしましーお前がふるなよ！」

ハイドン「その3人の美しさを並べると？」

マスター「エレン、ナターシャ、アリーーだからふるなよ！」

ウェイク「どうでもいいから早く逃げようぜ！この勝手口から逃げるんだ！そこしかないけどな。」

ナターシャ「私たちも連れていってください！」

ウェイク「よかろう！」

ハイドン「もちろん！」

メルラ「ダメだ！」

ウェイク「一人増えてる-----ッ！（笑）」

第3章 シリス！助ける！

かくして、ハイドンとウェイク、そしてメイド3人は勝手口から外に出た。先頭はウェイク、メイド3人、そして殿軍はハイドン。(ガットウーゾ「不細工な順だな」)こちらにはゾンビはいないようである。に見せかけて左右からゾンビ10匹ずつ迫ってくる！しかし……

マスター「しかし、右側のゾンビに、えーっと『フォース』²³が放たれ、ゾンビはふっ飛んだ。」

²⁰ この危機的状況でそんな事を思いつくなんて！ハイドン！恐ろしい子……ちなみに48人のネタは不明。

²¹ リプレイじゃそれなりの分量だが、ここまで異常にペースが早い。早口だしハイドンもウェイクもかなりあせっている。マスターの思惑どおり、キレイにバイオハザードシチュエーションに入り込んでくれました。満足。(マスターも盛り上がってたんだけどね)ただし、興奮したウェイク(の中の人)がウェイクのものではないセリフを乱発する。おまゝは誰だ。

²² 正司歌江・照枝・花江の3人姉妹による漫オトリオ。三味線とギターで「♪うちら陽気なかしまし娘」と歌う。女三人寄ればかしましいと言う言葉もある。

²³ プリーストの魔法で神聖なる力と身に宿る気迫と根性をいい感じでブレンドし、敵にぶつける攻撃魔法。プリー

ウェイク「何奴！？」

謎の女性「今のうちに突破するわよ！！」

マスター「という声が聞こえたので、君たちは包囲を突破した。その女性とあと3人くらいの戦士が…で、しばらくして落ち着くと、メルララ、ガットウーゾ。」

メルララ「ん？」

マスター「君達の家の前にハイドンとウェイク、そして謎の女性、メイド3人、戦士3人くらいが現れた。」

ガットウーゾ「ゾンビが来た！閉めろ～！」

ハイドン「閉めないでくれえ～ッ！」

マスター「言っとくけど、ここで合流しないとゾンビの仲間入りだよ。」

こうして一行は、かろうじて(数人が手傷を負わされたものの)ゾンビの包囲を突破し、メルララ家の裏手の馬小屋で合流する。ハイドン、ウェイク、メルララ、ガットウーゾ、メイド3人、戦士3人と謎の女性-神官戦士(ウェイク「ファランギース²⁴殿！」)である。

戦士のうちの一人「団長！この街はもうダメです！！」

一同「団長？」

メルララ「団長！貴方は何か知ってるの？」

団長(謎の女性)「こんなことになるとは、散々ね。で、貴方達がハイドンとウェイクね？」

ハイドン「ん！？何で知ってる？」

団長(謎の女性)「私は西ネイル遺跡調査団の団長のシリス。貴方達を助けに来たの。本当は確保して色々話を聞くつもりだったんだけどね。」

ウェイク「！！」

シリス「まあ、こんな事態になってしまった以上、協力してこの街を脱出するしかなさそうね。よろしく。」

ウェイク「ということは、この街はどうなるんだ？」

シリス「私がわかる訳ないじゃない(笑)」

メルララ「とりあえずジェスレンとレイフを助けよう。」

マスター「(そういう風に他のシナリオを勝手に持ち込まれても困るんだがなぁ…)サイコロを2個ふって10以上が出たらいいことにしてやるよ。」

しかし、マスターを困らせる方向についてサイコロ運がやたらよくなるのか、ジェスレ

ストがもつ最初の攻撃手段だが、レベル1ではなく、ある程度熟達しないと使う事が出来ない。

²⁴ ファランギース。これも『アルスラーン戦記』より。ミスラ神を信仰する女神官(カーヒーナ)。ミスラ神殿がアルスラーン生誕時にその名で寄進されたものであることから、神殿よりアルスラーンを守護するべく派遣された。弓の扱いに関しては神業的な腕前を持ち、精霊(ジン)の声を聞くことができる。自他共に認める絶世の美女であり、ギーヴやクバード、ラジェンドラらから言い寄られるが本人はあっさり拒絶している。とんでもなく酒に強く、ギーヴとラジェンドラが二人がかりで酔いつぶそうとしたが反対に二人が酔いつぶれる事になったほど。ちなみに、ものすごい毒舌(Wikipedia)



ン少年、と父親のレイフ共に生存していた。

マスター「ただ、生き返らせたんだからお前が責任を持ってロールプレイしてくれよな。」

ウェイク「ジェスレン生きてたか！」

メルララ(ジェスレン)「もちろんさ！」

ウェイク「親父も生きてたか！」

メルララ(レイフ)「もちろんだ！」

マスター「(更に二人追加で総勢4+3+4+2で13人か。大所帯になったなあ……)」

ウェイク「とりあえずこの街を脱出しよう！」

ガットウーゾ「じゃあ先陣は、団長で。」

シリス「何で私が前に行くの？ 貴方達が前に行きなさいよ！」

メルララ「この人は従者だから、私の命令しか聞かないわ」

ガットウーゾ「いや、そんな事もないけど(笑)」

シリス「じゃあ私も貴方の命令を聞く必要はないじゃない。」

メルララ「やっぱ事情を知っている人が前にいった方が……」

シリス「事情なんて私だって知らないわよ。」

ウェイク「じゃあ……貴方は一体何をしたいんだ？ 俺たちはクマガイアに向かいたいんだが」

シリス「(全く……)そんな先の事より前にやる事があるんじゃないの？」

マスター「すると、またドンドンドンドンと窓あたりから、「脳みそ食わせろ〜〜〜〜！」ということになってる」

ウェイク「ああ、こいつら？ って顔をする。」

第4章 ハイドン！躊躇なし！

さて、方針が決まったところでおもむろに街の地図が登場(図 2 トコロザ市)。一行はメルララ邸の裏手(北側)にいるのだが……

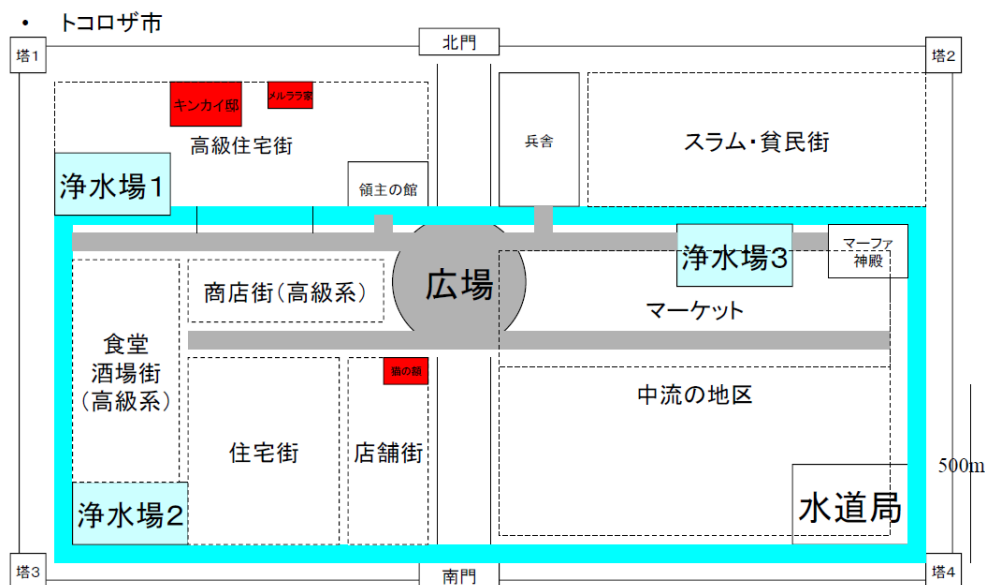


図 2 トコロザ市

ウェイク「この街から脱出するには、北か南の門しかないわけだ。」
メルラ「繁華街の方にはゾンビがたくさんいる可能性があるんで、北の門から出ましょう。」

実は、北門は近いのだ。

マスター「北門に向かうのだが…目のいい奴。」

メルラ「はい。」

マスター「まあ近づくとわかるんだが…どうやらみんな同じ事を考えているらしく、(夜なので)門は閉まっている、脱出しようとしている殺到している。そしてそれを取り囲むように大量のゾンビがいる。」

ガットウーゾ「ひえええ〜」

シリス「あそこから出るのは無理ね」

ウェイク「ありやま、無理か……orz」

ハイドン「他に出口はないのか？」

ウェイク「もう一つは南門だ。ちょっと遠いがな。」

ガットウーゾ「でも、南門も同じようなものだろう？」

メルラ「何？この街は城塞都市なの？」

マスター「そう。城塞都市。(初めに説明したやん)」

ハイドン「……わかったぞ！この街は地下道が発達しているはずだ！」

ガットウーゾ「下水道か。」

ハイドン「ギーヴのように！²⁵」

ウェイク「ギーヴのように」

残念ながら下水道、マンホールと言う程のものはないのだが、街を一周するような水路はある。一行はここから逃げるつもり。ちなみに、門に殺到している市民を救うためにガットウーゾがメルラの命令でライトニングをゾンビに向かって放ったりした。手近な水路に向かう事にした。水路の脇には随道があるので、一行はここを歩くが…

途中でゾンビが落ちて襲い掛かってくる(戦闘ははしより)。それらをぶっつけたり、飛ばしたりしながら、何とか歩いていく事になる(ウェイク「ちぎっては投げ、ちぎっては投げ…」)

しばらく進み続けると、浄水場らしき地点に辿り着く。トコロザ市では上下水道が完備しているが、街にある3箇所の浄水場で浄水を行っている。そのまま水路を通り、食堂・酒場街を経て2つ目の浄水場を経由し、南門に辿り着くが…

マスター「「脳みそ食べろ〜」「ぎゃー」「ぐひい」「うがー」という声、悲鳴が聞こえる…」

ウェイク「数は、少ない？……そんなコトもないね。」

マスター「阿鼻叫喚というわけだな」

ウェイク「どうしよう？…朝まで待つか？」

ハイドン「じゃあ、(水道を)グルグル回るか。」

²⁵ 旅の楽士 ギーヴ。自称『流浪の楽士』、他称『七枚舌の女たらし』。「アルスラーン戦記」からだが、私は未読なのでそんなシーンがあるかよく知らないのだよ。

メルララ「塀を乗り越えて出るわけにはいかないの？ロープでフックかなんか引っ掛けて」
マスター「壁の高さは15メートル。壁面は滑らかだね。」
ガットウーゾ「俺らはいいいけど、メイドは無理でしょう。」
ウェイク「メイドさん、他にこの街に出口はないのか？」
メイド「……わかりません。」
ウェイク「そうだと…やはりゾンビを駆逐して門から突破するしかないか？」
ガットウーゾ「最終手段はやるかやられるかか…」
ウェイク「今回のシナリオの最大の山場だな。」
ガットウーゾ「早くも」
メルララ「放火して回るとか？ゾンビは全員、焼け死ぬと思うけど。」
ガットウーゾ「俺達もな」
ウェイク「こっち(町の東側)には？」
マスター「同じように、市街になっているけど、市場、住宅街、マーファ神殿がある。更に、街の東南の隅に街の水道を司る水道局がある。」
ガットウーゾ「神殿に逃げ込むか…」
ウェイク「水道局に行って水路の地図を手に入れるんだよ。どうだ？なんか前にもやった事があるような！²⁶」
メルララ「じゃあ、水道局に行ってみましょう」

一行はロールをして、南門に群がるゾンビ共をやり過ごして水道局の方向に進めるかを試みるが…メイドが転倒し、派手に音を立ててしまった。

ハイドン「ナターシャ！！(笑)」
マスター「ゾンビが新鮮な肉(一行)を見つけ、「肉うううう」と襲い掛かってくる」

しかし、降りてきたゾンビは2匹だけだった。ハイドンが1匹をふっ飛ばす。メルララは矢を放ったが1ゾロにより明後日の方向、ガットウーゾも『エネルギーボルト』で援護をするが、ダメージ判定の1ゾロにより、この主従は役に立たず。最終的にはウェイクが普通に攻撃をし、もう1匹のゾンビを撃退する。しかし…

マスター「しかし…ナターシャが…」
ガットウーゾ「うう、体が寒い！とか言い出した？」
マスター「うなだれている」
ハイドン「や、やばい！」

ナターシャ「ウェイク様…ありがとうございます。お礼に……脳みそ食ってあげる
～！！！！」

マスター「襲い掛かってきた！」
ハイドン「成仏！せい！」
マスター「ハイドンは何のためらいもなく、ふっ飛ばした。」
ウェイク「こいつ…なんの躊躇もなく……(笑)」
メルララ「ちょっと待て！なんでゾンビになったんだ？」

²⁶ すまん。いつだっけ？多分ダンガーラ編だと思うが…

思い出してみるが、ナターシャは先ほどの屋敷からの脱出時にゾンビから傷を負わされていた。

エレン「ハイドン様、何を・・・！？」

ガットウーゾ「落ち着けお前ら！まさかケガを負わされていないだろうな・・・？」

アリー「え！？負ってますけど・・・さっき逃げるときに・・・」

ハイドン「うおおおい！！」

ガットウーゾ「目を瞑れ、まわれー右！祈りなさい！」

マスター「・・・祈ってるよ」

ガットウーゾ「じゃあ・・・手をロープで縛っておこう。」

エレン「ハイドンさん、やめてください。なんでこんな事・・・！」

ハイドン「これは私の趣味だ！（爆笑）」

ハイドンの趣味嗜好について議論する間もなく、続々とゾンビは追って来ている為、一行は慌ててその場を離れる事にする。しかし、ここでジェスレンとレイフも同様に手傷を負っている事が判明した・・・そしてレイフが・・・

マスター「すると、レイフが振り向いて」

レイフ「すまんが俺はさっきゾンビに傷つけられてしまった！俺はもうダメだ・・・お前ら先に行ってくれ。俺がゾンビを食い止めてやるぜ」

マスター「と言って、レイフは追ってくるゾンビに向かって行った。」

ジェスレン「パパぁ—————！」

ウェイク「パパア—————！」

ガットウーゾ「お前も傷を負っているわけだから、お前も一緒に送り出したところだけどな！（笑）」

ハイドン「パパはあきらめろ！」

ウェイク「蘇らせたのが非常に腹立っているらしいな」

マスター「いや、そんな事はない。」

ガットウーゾ「ジェスレン！お前まで行く事はない！と言いつつ縛って連れて行く(笑)」

第5章 ハイドン！血も涙もなし！

こうして、ゾンビに傷を負わされたと思われるメイドおよびジェスレンを縛り、ハイドンがその縄を持ち（ハイドン「これはあくまで趣味だからな。趣味を持ったほうがいいと思ってさ！」）、一行は水道局に到着する。水道局は以下のようにになっている。（図 3 水道局）

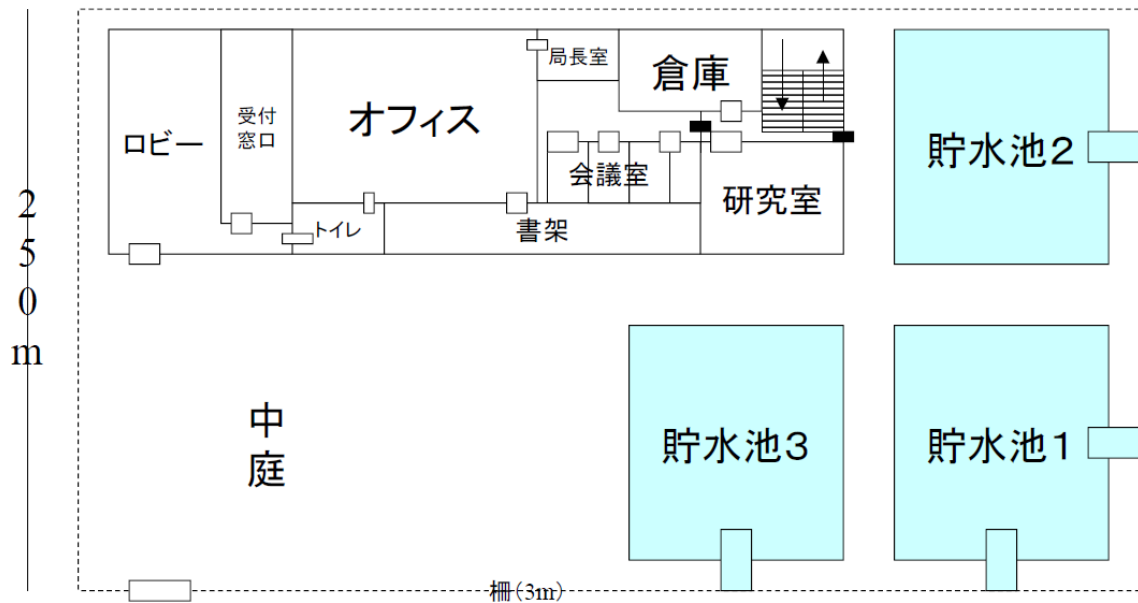


図 3 水道局

ウェイク「とりあえず、中に入ってみよう」

マスター「で、君たちが上がったところは中庭になっていて、パイプのような器具が散乱しているが……うあああ…ああ・あ・あ……4匹」

ウェイク「どうやら先客がいるらしいぞ(笑) とりあえずお客様は4名だ。ハイドン、頼む」

ハイドン「任せろ！」

ウェイク「俺は周りに他にいないか警戒しよう」

マスター「うあああああ…ああ・あ…ああ…2匹」

ウェイク「増えたよ(笑)」

一行はダッシュをして中庭を突破し、水道局の入り口を目標とするが、メイドやジェスレンを抱えているハイドンは不覚にも攻撃を受け、組み付かれてしまった。しかし、ギリギリ踏みとどまり、再度ダッシュをして入り口に辿り着いた。

マスター「ところがだ、ハイドンがダッシュする途中でアリーが暴れたした」

ハイドン「じゃあ、群れの中に捨てる…」

マスター「じゃあ群れの中に……血も涙もないな！！！」

ガットウーゾ「いやいやいや、プレイだから、プレイ！」

メルララ「ゾンビはゾンビを襲わないだろ？」

マスター「うーん、いやまあ、なりかけだからねえ…まだ肉が勝っているようで、君が投げたエリーの死体に群がってガツガツガツガツ……」

ガットウーゾ「ひでえ……」

ハイドン「マスター、ひどいぞ！！！！(笑)」

ヘレン「アリー！アリー————ッ！(笑)」

マスターがひどいのか、ハイドンがひどいのか不明だが、惨劇は止まない。一行は何とか水道局

に入る事が出来た。ガットウーゾが『ライト』を唱えて明かりを点した。一行が入ったのはロビー

マスター「荒らされているが、ゾンビはいないね」
ウェイク「とりあえずこの中は安全みたいだな。」
メルラ「じゃあ、ジェスレンの体を調べる」
ジェスレン「メルラさん、ボクもあんなっちゃうの・・・？」
メルラ「大丈夫。治せるから。」
ガットウーゾ「ちょっと寒いだけだけどな(笑)」
ハイドン「沈痛な面持ちで・・・」
マスター「あんな事(斧でふっとばす、群れに放り込む)しといて沈痛も何もないもんだ(笑)」
ガットウーゾ「夢中だったからな・・・」

ジェスレンは目の前の惨劇を見すぎてしまい、酷く傷ついている。特にハイドンの斧(笑)

メルラ「(ロールをする)14。」
マスター「ジェスレンの体を調べてみました。14だとちょっとわからないなあ・・・普通に少し傷を負っているようにしか見えない。」
メルラ「仕方ないな・・・」

一方、ウェイクはロビーからカウンターの奥を調べる。するとここにもゾンビがいた。ちなみに、マスターは元々このシチュエーションにおいてゾンビとゲール²⁷を取り混ぜるつもりだった事を思い出したので、このカウンター奥にいたのはゲール×2、ゾンビ×2である。しかし、ゲールである事を誰も識別できなかったので何の意味もなかった。

第6章 メルラ！必死！

メルラ「じゃあ、さくつとやっちゃいましょう。」と、死人4匹との戦闘が開始される。しかし、いくらゲール混じりでも、数々の悲劇を繰り返してきた一行の敵ではなく、3ラウンド経たずに全滅させた。これでオフィスはにいた敵もいなくなり、安全を確保した事になる。

メルラ「じゃあ、生体サンプルも手に入った事だし、また毒について調べるよ。」
マスター「なるほど。それは正しいな」

再びメルラは調査を行う。してみると、ジェスレン少年の為に必死になる姿は読者の涙を誘う。しかし、先ほどよりもロールの目が低かった・・・

²⁷ ゲール。スケルトン、ゾンビと続く代表的アンデッドモンスターの1種。日本語だと食屍鬼と書かれる事が多く、名前の通り屍、死体を食らうが、生きている人間に対しても殺してしまえば一緒だと安直に考えて襲ってくる。ゲールの爪には毒があり、これを受けると一定時間麻痺してしまう。この点をもってして、初級の冒険者にはゾンビと一線を画して、脅威になっている。



マスター「それじゃあなあ……毒じゃあ、ないんじゃない？くらいしかわからなかった。」

メルララ「ゾンビ化するのは毒じゃないみたいよ！じゃあ、グールも調べてみよう」

ところが、また動いていたグールの腕だけがメルララを引っかく。

ガットウーゾ「今のうちに遺産は私にという遺書をお願いします！！（笑）」

これにより3点のダメージを受ける。ただし、麻痺はしなかった。

ウェイク「しかし、ゾンビになる。」

マスター「いや、なるかなるかわからないね。」

メルララ「しっかりトドメを刺してよね！！」

ウェイク「ハイドン～」

ガットウーゾ「惜しいな」

マスター「さて、というわけでゾンビの毒についてグールを調べてみたけれど、返り討ちにあっただけだった」

ウェイク「まあ、それだったら地下水路から外に抜けられないか調べてみよう」

マスター「まあ、水路の地図はあるからねえ……水路そのものは街の中を回っているだけ、ちなみに地下から川を汲み上げている。」

メルララ「地下の川から外に出られないかしら？『ウォーターブリージング²⁹』とかあればねえ……」

水道局でも収穫はなく、一行はマーファ神殿に向かう事にしたが……この時ガットウーゾが今まである事に気がつく。

マスター「ガットウーゾ、君はどうやら、君が今まで見たきた中で、水の中にゾンビがいた、ということはないことに気がつく」

ガットウーゾ「なるほど、ということは水の中にいる限りは安全なんだな。」

メルララ「なるほど。じゃあ水を調べてみよう」

ガットウーゾ「じゃあ、ゾンビに水をかけてみよう」

マスター「まあ……水をかけたところで何かあるわけではない。」

一行はサンプルで取得した水をいろいろな方法で調べるが、水そのものが特殊だというわけではなかった。ちなみに季節は今2月（冬）。と言う情報は公開していなかった。ゴメン。

この段階でハイドン（の中の人）は仕事で疲れたのか、寝てしまっている（ハイドン「zzz……何をふるんだ？」メルララ「まだふる場面じゃない（笑）」）

一行は水道局の調査を続け、局長室から街と水路の地図を発見する。が、それよりも重要そうなメモを見つける

地下水脈のカギは局長が持ち帰って管理する事

一行は更に局長室を調べる。が、地下水脈のカギは発見できなかった。調べてみると、

²⁹ Water Breathing. 水中で呼吸するための魔法。水の精霊魔法の一つである。

局長が家に持ち帰ってしまったようである。局長の家は住宅街であり、街をゾンビがさまよっている事を考えれば決して近い距離ではない。など一行（ハイドン除く）が悩んでいると……

ジェスレン「メルララさん、メルララさん、頭が痛い。苦しいよ……」

ガットウーゾ「あ、きた！」

メルララ「プリーストの方に治してもらいなさい。なんかかけて」

ウェイク「そんな事言われても……原因がわからなければ治療のしがいもないだろう。毒なのか病気なのか……」

メルララ「『キュアポイズン』をやって。」

ウェイク「毒だったら効くけどねえ……」

ジェスレン「メルララさん、メルララさん、食べ物が欲しいよ。お腹がすいたよ……」

ガットウーゾ「(笑) やばい、きた！」

ウェイク「しょうがない！『キュアポイズン』をかけてやろう。」

ウェイクはジェスレン少年に対してキュアポイズンを唱える。が……

ジェスレン「お腹すいたよ。どんどんお腹がすいてくるんだ……」

効果なし。

ガットウーゾ「じゃあ、水袋にとっておいた、水をかけてみるよ。」

マスター「そうすると、少しした後で「ボクは何を言っていたんだろう……」、と。」

ウェイク「なんか治ったよ。水かけてやればいいのかよ？」

マスター「冷えたってことだよ。そうそう、メルララはその時触っていたんだが、高熱を感じていたんだ。それを冷やしてやったので。回復したということかもしれないね。」

ウェイク「あれ？僕は何をしていたんだろーお腹がすいたよ(笑)」

マスター「ということになるかもしれないね。」

ガットウーゾ「そうなったらもうだめだ。」

ウェイク「とりあえずそのカギを探すのが先決だ！」

ガットウーゾ「局長の家に行くのか？」

メルララ「カギいらない。『アンロック』²⁹で開けちゃおう！」

そして、一行は奥に進み、カギのかかった扉に突き当たる。(ウェイク「ロッソ、任せた」マスター「おう、任せろ。ついでいねえよ！(笑)」これをガットウーゾの『アンロック』で開き、扉の奥へと進む。ちなみに、この間メルララは夢で授かった弓について調べる。これは『止めの弓』という名前のショートボウでクリティカル値－1、攻撃力＋1の短弓である。さらにこの間にガットウーゾの精神点が少なくなってきたので、ウェイクが『レストアメンタルパワー』³⁰を唱えて回復させていた。

²⁹ 開錠の呪文。

³⁰ ソードワールドでは呪文は精神点を消費して発動する。いわばMPの事。この魔法はプリースト、僧侶が唱える魔法で、自身の精神点を他の術者に移し変える。このためソードワールドにおいてプリーストは「電池」と呼ばれている。

第7章 ウェイク！ボロボロ！

ウェイク「じゃあ、この手前の左側の扉を開けるよ」
マスター「OK。開けると、中には工具などがあり、倉庫と思われる。が、そんな事を言っている間に「お、おい！お前まさか！」とシリスの連れてきた戦士が震えだしてー」
ウェイク「ハイドン、お前まさか！」
マスター「戦士の一人がゾンビになり、仲間に襲い掛かった。残りのうち一人は引き剥がそうとしているが、もう一人は肩口を引き裂かれて、既に絶命した。」
ガットウーゾ「二名脱落！」
ウェイク「早いなオイ！」
戦士「シリスさま、早く行ってください！！！」
シリス「わかったわ、ありがとう！。さよなら……」
マスター「とハイドン程度には非情に、階段を下って行った。みんなも一緒に(笑)」

少々強引な展開である事は確かだが、ハイドンの中の人が眠そうなのでストーリーを先に進めようと思っていた。ところが、ここでウェイクがやらかしてしまう。

メルララ「下っていきましょう」
ウェイク「ちょっと先に行ってくれ。俺はこの部屋(研究室)を調べる。」
マスター「(え？いいのか？)わかった。君一人だね。で、その部屋の扉を開けると、生存者という生きてる人が4人います。」
ウェイク「こんなところに生存者が。大丈夫かお前達！」
マスター「えーと、君が声をかけると、生存者達の右腕が巨大な爪になり、ウェイクを攻撃した。はい、4発ね。避けて。」
ウェイク「生存者は生存者でも騙された！」
メルララ「私たちは下にいるからねえ……」
マスター「うむ。こんな状況になっているとは知らない。なんか、上の方が騒がしいんだけど。」

さて、知らない間にウェイクは敵の攻撃を受けてしまう。4発まとめて命中し、防御のロールは1ゾロを出してしまい、12点の大ダメージを受けてしまう。これにより、ウェイクの生命点は残り1点

メルララ「ん？何？また転んだんじゃないの？(笑)」
ウェイク「逃げるよ。」
マスター「じゃあ、君は瀕死の重傷を負いながら、バタバタと慌てて、ドアを閉めて、階段を下りてきたんだけど、どうしたらいい？ちょっと見ない間に12点くらいのダメージを受けてる(笑)」
メルララ「な、何が！？」
ガットウーゾ「ま、まさか！お前まで！(笑)」
ウェイク「いやー、ビックリした。」

幸いな事にウェイクはプリーストなので『キュアウーンズ』を唱えて自身のダメージを回復させる事が出来た。

マスター「さて、そいつらがウェイクを追って、(ドアを開き、)階段を下りてくるよ。」
ガットウーゾ「なんじゃ、ありゃ！」

メルラ「セージチェックしていい？・・・(1ゾロ)・・・あれはドラゴンだ！(笑)」
マスター「・・・見た目、普通の人間なんだけど、右腕が異様に発達して、巨大な爪になっている。」
メルラ「見た事も、聞いた事もない生物だわ。とりあえずやっちゃいましょう！」
ウェイク「あいつらはめっちゃくちゃ強いぞ」
ガットウーゾ「お前がそんなボロボロになってるから(笑)」

ハイドンは戦闘状態に突入したために叩き起こされ、以降プレイに参加してくる事になる。とはいえ、ウェイクが不意打ちでボロボロになりはしたが、基本的には大した相手ではない。

最初はメルラが『コンフュージョン』を唱えて、敵の内1匹を混乱させようとする。この試みが成功し、敵の内1匹は無力化する。更にガットウーゾが『ライトニング』を唱えて追い討ちをかける。1匹は抵抗に失敗し、かつガットウーゾが2度クリティカルヒットを発揮したため、一撃で感電死し、倒される。もう1匹は抵抗に成功したので生存した。

残った1匹に対し、シリスが攻撃を行い瀕死状態に追い込む(ウェイク「こいつら打たれ弱いな。攻撃力はあるのに」マスター「そういう敵だからね。」)。

敵は反撃をするが、シリスとガットウーゾに攻撃をするが、いずれも大したダメージにはならなかったが、ガットウーゾは敵の毒を受け、麻痺してしまう。(ガットウーゾ「ガットウーゾ何も出来ません！」)

中の人が意識朦朧としているハイドンはキャラクターは元気に攻撃を行い、更に1匹を倒し、もう1匹に対してウェイクの『フォース』が炸裂する。これもクリティカルヒットをして、仕留める。(ウェイク「よくもやってくれたなこの野郎！！」)残るは『コンフュージョン』を受けた1匹であるが、最後には砂となって崩れ去ってしまった。

ウェイク「またか・・・前回のシナリオと同じだ」
メルラ「こいつは一体・・・？」
シリス「やはり・・・こいつらだったのね？」
ハイドン「何か知ってるのか？」
メルラ「何か知ってるようね。真相を話さない！！じゃあ、貴方達を追ってこの街をこうしたということね。(笑)」
シリス「こいつらは私たちの敵、こいつらが何故街をこうしたかはわからない。ま、いずれにしろマトモな動機じゃないでしょうけれどね。」
ハイドン「組織なのか？」
シリス「私たちも全てを掴んでいるわけじゃないけれどね。不老不死を求める悪の組織・・・言って恥ずかしいんだけど(笑)」
ガットウーゾ「いやあ、実に魅力的(笑)」
ハイドン「お前入りたいの？不老不死になれる奴なんかいいえだ！！(笑)」
ウェイク「お前誰？(笑)」

第8章 少女！強引！

さて、一行は階段を下りて地下に向かうが、その間・・・

ウェイク「そういえば、ガキンチョ(ジェスレン)はどうなってるの？」

マスター「うむ。実は飛ばしていたんだけども、「お腹すいたよー」バシャーン！（水をかける）のやり取りが繰り返されている（笑）問題はその間隔が短くなってきている事だ。」

メルラ「じゃあ、急ぎましょう！」

ハイドン「治らないのかなあ・・・」

階段を下りた先は、非常に広い部屋になっていて、地下水脈が流れている。そして、一行の予想通りポンプによって地下水脈から水を汲み上げている部屋であった。すぐさまメルラはポンプの出力を最大にした。しかし問題は、この部屋の一角に内側から掘ったような穴があった。一行はこの穴を先に進む事にする。しばらく進んだ先には・・・

マスター「信じられないような光景が広がっている。」

ウェイク・ハイドン「な、何！？これは・・・」

マスター「更に広い空間となり、古代遺跡が広がる。壁には古代王国の芸術的な文様をかたどった彫刻や柱、それに入り口などが並んでいる。それぞれの一角は魔法の光によってほのかに光っている。高さ—というか深さは100メートル程。」

メルラ「セージチェックで調べてみよう（ロール）」

マスター「まあ、間違いなく、よくある古代遺跡だという事はわかる。」

ウェイク「また、地下の古代遺跡か」

ガットウーゾ「まあ、見れば分かるな。ハイエンシエント³¹で何か読めるのかな？」

マスター「何かあったとしても読める距離じゃない。かなり巨大な遺跡で君たちはそれを少し離れた位置から見ていることになるから」

ウェイク「どういう感じ、お城？街？」

マスター「敦煌³²」

かくして一行は敦煌に似た古代遺跡に辿り着いた事になる。そして、（ハイドンの持っていた）プレートが光りだし・・・再び（メルラ）遺跡の少女が現れる・・・

少女「待っていました。やはり来たのですね。解放する者達よ・・・」

ガットウーゾ「いやいや、そんなつもりはないですよ」

少女「いや、貴方達が来るという事は、もうこの遺跡は終わるという事です。その為に私が起動されたのですから。」

メルラ「わけわかめなんですけど」

³¹ 上位古代語。呪文はハイエンシエント・ルーンで書かれている。ソーサラーの魔法はかつての魔法全盛の時代に急速に世界中に広がったとされ、ハイエンシエント・ルーンは発音、文字ともに世界で非常に似通っている。難しく書いたが、要は魔法語。

³² 敦煌（とんこう、ピンイン:Dūnhuáng トウンホワン）市（-し）は中国甘肅省北西部の都市。かつてシルクロードの分岐点として栄えたオアシス都市。近隣にある莫高窟とそこから出た敦煌文献で有名である。歴史的な敦煌は現在の敦煌市と安西県を合わせた領域にほぼ重なる。（Wikipedia）



少女「街にいま、死人が溢れているという事は、ある者がこの遺跡に潜入してウィルスを持ち去ったのです。そして、それを街中の人に広げたのです。」

一行は少女についていきながら、ウィルスについて話を聞く。

＜ウィルスー 3-08 の効果＞

血液から感染し、脳に留まり、以下の効果を生み出す

・ドーパミンの過剰噴出(欲求の過剰放出。食欲・暴力)

・麻薬の効果、痛みを感じない、理性が飛ぶ(前頭前野・海馬を中心とした脳の組織の破壊)

→まあ、一言「ゾンビ」でいいんだけどさ。

元々は血液を通した適度な細胞の活性化による老化阻止を目的として作られたが、以下の点において失敗してしまった。

・脳に留まってしまう

・麻薬物質のみの過剰な噴出

感染経路;

ウィルスそのものは強くはないので生命抵抗があれば問題ない。牙、歯から感染

36度の温度を好み、冷氣によって冬眠状態、さらに冷たいと死(高温には強い)³³

更に、このウィルスを持ち出し、蚊を媒介として街中に広げた男が奥におり、一行を待ち受けているという事を知る。

少女「あいつはまだこの遺跡の奥にいます。あなた方の力で倒してください」

ウェイク「できるのか？俺たちに・・・」

少女「頑張ってください」

ハイドン「え？手伝ってくれないの？」

少女「私は手伝う事は出来ないのです」

ガットウーゾ「しかし、倒してくださいって・・・何のメリットもないよね。俺たちには」

ウェイク「退路もないけどな。」

メルララ「この街をめちゃくちゃにしたお返しをしてあげましょう。」

ガットウーゾ「しょうがないな。倒しますか。」

第9章 デラッツィ！哀れ！

遺跡の奥には広い部屋があり、(少女はいつの間にかいなくなっている。ガットウーゾ「いなくなる前に俺の精神点を回復させてくれ——っ！ウーン！(笑)」)奥に小男がいる。ハイドンが夢で見た男だ。

小男「よくきやがったな！」

メルララ「よくも、この街をめちゃくちゃにしてくれたわね！」

³³ 何となくバタリアンを貼ってみる。一番これが近いかな。



小男「この街は我々ヘルハザードが頂く！ここから我々の支配が始まるのだ！」

ハイドン「お前は何者だ！」

小男「俺は蚊のデラツツイ³⁴！！俺こそが最強なのだ！！！」

マスター「と言って、そいつは変身した。デッカイ蚊になった。」

小男「キョーキョキョキョキョ、お前らの血を吸ってやるわ！！（笑）」

ハイドン「こいつら笑い声が一人ずつ違うからな（笑）」

変化して巨大な蚊となったデラツツイに加えてデラツツイは巨大蜘蛛、ムカデ3匹、そしてヘルサーバント（先ほど戦闘した敵の配下）を召還した。

デラツツイ「この私のかわいい配下に勝てるかな！？」

ハイドン「確かにかわいいが勝って見せる！！」

ウェイク「かわいいのかよ！（笑）」

そして、戦闘が開始される。まずはメルララがデラツツイに対して『コンフュージョン』を唱えるが、1ゾロで失敗してしまう。続いて密集している敵に対して『ライトニング』を唱える。この結果、ムカデ、ヘルサーバント、デラツツイ、巨大蜘蛛、ムカデ達にそれなりのダメージを与え、かつ蚊のデラツツイに対してもダメージを与える。が・・・

ガットウーゾ「あとは任せた！パタン！³⁵」

シリス「面白いからそれあんたもう1発打ちなさいよ」

マスター「と、ガットウーゾに対して『トランスファーメンタルパワー』を使ったよ。7点回復」

ガットウーゾ「やったあ！復活！むく。」

そして、デラツツイだが・・・

デラツツイ「貴様！うっとうしいぞ！！キョーキョキョキョキョ！」

マスター「と言ってガットウーゾに攻撃してきた。よけてえん。」

ガットウーゾ「俺かよ？ソーサラーだよ？」

ウェイク「目立つからねえ・・・」

デラツツイはガットウーゾに対して空中を飛来して攻撃をし、7点の大ダメージを与える。

マスター「蚊に捕まれて、口先が君の体に刺さり・・・吸ってる感じがする。」

ガットウーゾ「ズキュウン！ズキュウン！だあ～！俺は人間をやめるぞ～！！（笑）³⁶」

³⁴ 元ネタはマテラツツイ。だから、ワールドカップが終わった直後だったんだって！マルコ・マテラツツイ(Marco MATERAZZI, 1973 年 8 月 19 日 -)はイタリア、レッチェ出身のサッカー選手。ポジションはディフェンダー。193cm、92kg の体躯をいかしたパワフルなディフェンスが特徴。特に空中戦には無類の強さを誇り、強烈なヘディングは攻守ともに有効である。その体格からは想像が付かないが左足の精度が高い。2006 年のドイツワールドカップ決勝では、フランスのジダンを侮辱する発言を行って、頭突きを食らい、ジダンは一発退場に追い込まれた。

³⁵ ソードワールドでは精神点がゼロになると気絶する。

³⁶ おなじみ(でもないが)のジョジョネタ。血を吸う時の擬音。更にその後のセリフは我々がディオ様の言葉。

ウェイク「やったじゃん(笑)」

更に、巨大な蚊となったデラッツィの羽音に、一行は更にダメージを負うことになる。
一行に対して一斉にダメージが与えられ、ガットウーゾは生命点が尽きてしまう。

シリス「意味ないじゃない！！(笑)」

生死判定を行い、ガットウーゾはかろうじて生きている。しかし、助かったのであれば後はウェイクの『キュアウーンズ』によって復活する

ウェイク「こんな所で寝ているんじゃない！ドドーン！」

ガットウーゾ「なんか俺使い捨ての道具みたいだな(笑)」

デラッツィ配下の昆虫軍はこのラウンドは向かってきて終了。結果的に、突出してしまい、これが意外な結末を引き起こす。で、順番はハイドン

メルララ「ハイドン、蚊。蚊を潰しちゃって。」

ガットウーゾ「マデラッツィに頭突きを」

マスター「頭突き？」

ハイドン「違うよ。つらぬき丸だよ」

マスター「つらぬき丸じゃない。カチ割り丸だろ³⁷」

ハイドンの無我夢中の攻撃は命中する。これにより19点のダメージを与える。これでデラッツィは残り生命点が1点

マスター「……嘘だあ？(笑)」

ハイドン「ホントだよ。カチ割り丸だからね。」

デラッツィ「おのれえ！」

マスター「とか言いながら上へ逃げていった。」

そして、最後にはガットウーゾの『エネルギーボルト』によって叩き落された！しかし、ガットウーゾ忙しかったなあ。

デラッツィ「うげえ！」

マスター「エネルギーボルトの蚊にピタンと当たり、ヘロヘロ〜と地上となり、ピタンと地上に落ちた」

メルララ「虫は？」

マスター「デラッツィの魔力が切れたらしく「あれ？僕たちは何をしてるんだろう？」とばかりに去っていった…(笑)」

メルララ「最小労力であった。」

ウェイク「よっしゃ！直接には何もしていないぞ！(笑)」



³⁷ つらぬき丸、エルフ名エアレンディル。エルフが鍛えた名剣の名前。指輪物語に登場する。ちなみに豪斧カチ割り丸の銘はこのつらぬき丸から取ったため、眠くて意識朦朧としているハイドン(の中の人)は素で間違えている。

デラツツィ「おのれ！お前ら～！だが、この街は我々の物だ、貴様らはこの街から出る事は出来ん！ガクウ！」

ウェイク「言わせておけば・・・！」

マスター「すると、先ほどの少女が現れて」

少女「ありがとうございました。では、この遺跡を終わらせます。」

マスター「と言うと、地鳴りが始まった！」

第10章 崩壊！トコロザ・・・

メルララ「こら！」

ガットウーゾ「ちょっと待て！」

ウェイク「ちゃんと出口を用意してくれたんだろうな！？」

M@「もちろん」

一行は少女に地下水脈(川)の小舟に案内される。これに乗って川を下り、トコロザ市郊外に脱出する。

少女「もう、この遺跡もトコロザ市も全て崩壊させるしか方法はありません・・・」

マスター「というと小舟は進み、地鳴りは激しくなって・・・ジェスレン？どうする？」

メルララ「ジェスレンは連れてるよ。」

まあ、いいでしょう。

マスター「さて、君たちは川を下り、地上に出た。遠くに見えるトコロザ市は地盤が崩壊し、沈んでいった・・・」

ハイドン「また大事件が起こってる！（笑）また噂になる。」

マスター「ということで、トコロザ市は地面の下に飲み込まれていった・・・」

ウェイク「とりあえずこの少年を治すのが当面の目標だな。」

そして、呆気にとられている場にロツソとキトが部隊を引き連れて登場する。

ロツソ「シリス様、ご無事でしたか！」

シリス「遅いわよ！今頃のこのこ助けに来て！アンタなんか知らないから！」

ハイドン「この女、恋心を抱いているな、ツンデレ系だ！二人っきりになると・・・ちょっと。ツンデレだよこいつら」

ウェイク「ロツソにそんな趣味があったとはな。」

メルララ「じゃあ次はロツソのツンデレ日記を歌にしよう(笑)」

つづく

(おまけ小説) キトとロッソ＜前編＞

「豆腐・・・か？」

ロッソが呆気にとられて呟く、キト＝バミアンもあまりに意外な物体の登場に面食らっている。キトは口車に乗ってわけのわからない探索に連れ出された事を一瞬後悔した。

話は6時間ほど前に遡る。

冒険者達はトコロザで無聊を困っていたが、東ネイル古代遺跡調査団長モクレンからトコロザ商業組合長キンカイの屋敷に招待される。ところが、モクレンにもキンカイにもロッソはいい思い出がなかった。古代遺跡の保護を謳いつつも、発掘品を見せびらかす事にしか能のないモクレンと、食欲で飽食なだけのただの豚であるキンカイはどちらも発掘品を巡っていざこざを起こしたことがある。いずれもロッソの機転で一応勝利したと言えるが、小人に限って執念深いのが世の常であり、うかうか招待を受けてしまうと何をされるかわかったものではない。

というわけで、資産家、権力のある者に敵の多いロッソは遺跡探検以外には厄介事に関わらないというのがポリシーであるが、1枚の手紙と共に一番の厄介事が訪れる。

『この私が来てあげたからには安心なさい。でも、挨拶くらいはしに来なさいよね！』

数年前ロッソは一人で遺跡を探索したが、盗掘者を捉える罠にかかってしまい窮地に陥っていた。その状況を救出してくれたのが西ネイル王国シリス王女率いる組織ガーディアンズである。王女の道楽だと言う者もいるが、本人は至って真剣に、ネイル王国の古代遺跡を護り、発掘品を正しい目的のために使おうとしている。ロッソとて野の獣ではない、窮地を救ってくれた恩義には報いたい(そろそろパトロンが欲しいというのもあったのだが)と思い、ガーディアンズに入隊した。しかし、シリスは生粋のトラブルメーカーであった。次々と厄介事を引き起こし、かつ本人は正しい事をしていると頑固に思い込んでおり、解決のためにロッソが骨を折る(時には実際に)事態が過去何度もあり、美人ではあるが出来るだけ関わりたくないと思っている。しかし、向こうは逆にロッソを気に入ってるようでーまあ、風来坊なので何か面倒があっても切り捨てればいい立場というのが大きいだろうが一何かとロッソに声をかけ、体のいい使い走りをやらされている。

「団長、ロッソ参上しました」

「シリスでいいって言ってるでしょ。で、どうなの？」

「・・・どう、とは？」

「とぼけないで、プレートと貴方の仲間たちの事！」

「.....」

ロッソはしばし躊躇う。少しでも厄介事の種があればそれを大地に埋め、水をやり、かつ肥料も大量に与え、しかも実まで回収しようとするのがシリスなのだ。更に厄介な事に、放っておいても勝手に行動してしまい、結果はほとんど変わらない。ロッソはありのままを全て話した。

「・・・なるほど。じゃあとりあえずそのハイドンとやらに会ってみるわ。いいわね？」

「(ダメだと言っても会うだろうに) 了解しました」

「じゃあそっちの件はこれで終わり。で、ロツソにはこっちを調べてきてもらうわ」

そう言ってシリスは1枚の地図と差し出す。地図の中央には赤丸がつけられていた。よく見てみると廃棄された古い城のようである。

「これは？」

「見ての通り古城ね。ただ、そこにヘルハザードの部隊を見かけたという情報が入ってきたの。ガセかもしれないけど一応調べて頂戴。」

「ふむ・・・」

ヘルハザード・・・ロツソがガーディアンズになってから何度か遺跡にて戦った事がある。目的は不明だが明らかに古代遺跡の秘宝を狙っている集団。しかもロツソの言によればエレガントではないやり方で。ただのトレジャーハンター集団であれば歓迎しないまでも敵対するつもりはないが、この相手だけは話が別である。

「了解。では暇をしている魔術師がいるのでそいつも連れて行くことにしよう。」

キト＝バミアンの顔を思い出した。彼もロッド同様暇を持て余しているはずだ。浮世離れしたエルフである事もあり、モクレンやキンカイのような俗物とは交わる事はできないのだろう。

「じゃあさっさと調べてきて。一応言うておくけど、何があるか分からないから、死んだりしないでね。死なれたりしたら色々困るんだから！」

「わかったわかった」

口は悪いが根はいい娘なのだ。こういう所が、不満に思いつつもガーディアンズを抜けられない理由かもしれないな、とロツソは思いながら歩み去った。

そして、ロツソとキトは古城の探索を開始した。

近くの住人に聞いてみても、怪異が頻発しており、何か不可解な出来事が起こっている事は容易に推察できた。特に住人が何人か行方不明になっているのは深刻な事態だ。

案の定中に入ると、ヘルハザードの配下と思われるお馴染みのシオマネキもどきの怪人や隙あらば血を吸おうとうかがうメイド、妄想狂の犬の化け物など予想の斜め上をいく怪異の大バーゲンであった。

そして、豆腐である。

否、豆腐ではない。いくらなんでもこんなに大きい—縦横高さそれぞれ2メートルはあろうか—豆腐など作れないはずだ、ロツソはそう思い直したが、表面の質感などを観察する限り明らかに豆腐としか思えない。

「こりゃ、一体・・・」

キトは恐る恐る近づく、その物体の表面はプルプルと震え、豆腐としての魅力を振りまいている。ここに醤油と生姜、箸があったら即座に食すところだ。

「ああ、そいつは失敗作だよ。豆腐人間を造ろうとしたんだが、間違えちゃったよ。」

「何!？」

ロツソとキトは同時に上方を仰ぎ見た。声の主はどうやら、豆腐の奥にいるようである。

(何をどう間違えたらこうなるんだ? というか、元は人間なのか? 豆腐人間って・・・なんの役に立つんだ?)

ツツコみたいポイントがあり過ぎて、ロツソはツツコむ機会を逸してしまった。

「お前は……！」

「ほう、これはこれは、よく来たな、キト。」

ツッコむ機会をうかがっていたロツソであったが、キトはそれ以上に謎の声の主に興味があるようだった。

「まさか、(こんなわけのわからない事をする人間が)知り合いなのか？キト？」

「……俺の兄弟子だ。ギジャ。」

キトは怒りを抑えた声で言い放った。

「オレのことを覚えていたかキト！すっかり忘れられてると思っていたんだがなあ……」

むしろギジャの事は時々夢に出てくる程よく覚えていた。師匠の元で共に魔法を学び、特に人間の肉体を強化する術を互いに良い競争相手として認めながら技を磨いていったのだ。

しかし、師匠が魔法の奥義をキトに譲る事を決めてから、ギジャの態度は一変する。街のゴロツキを寄せ集めて師匠を惨殺し、奥義を記したものを持ち去ってしまったのだ。それ以来キトはギジャを探し、罪を償わせるため放浪の旅を続けていたのだ。良い仲間達のおかげで忘れかけていたキトの忌まわしい過去が、今実体を伴って蘇ってきたことになる。

「忘れるものか！お前が師匠を殺した事を！奥義書を持ち去った事を！」

キトは怒りをこらえきれずに叫んだ。しかし、ギジャもまた怒りと恨みに満ちた声で返してきた

「何を言ってやがる！貴様があいつに取り入って俺を潰そうとしたんだろうが！こっちこそ忘れてねえぞ！」

「そっちこそ何を言ってるんだ！師匠がお前を選ばなかったのは、お前のその邪悪な心が目覚めてしまわないよう考えての事だ！俺たちの技は心の弱い者には危険すぎるんだ！」

「けっ！それで殺されちゃあどうしようもないぜ。」

「き、貴様あ……！」

「ハラワタ煮えくり返ってんのはこっちだって同じなんだよ。次会ったときは殺す。そう決めてたんだ！」

ギジャはそう言って手を上げた。すると豆腐が立ち上がり(と表現するしかないのだが)キトとロツソに覆いかぶさってきた。不意を打たれた二人はあっと言う間に豆腐に吞まれてしまった。

(中も豆腐だな……)

口だけではなく耳や鼻からも豆腐が入り、息苦しくなるいまわの際でロツソは思った。しかし、所詮は豆腐、息苦しかったのは一瞬だけで、勢いのついた自重に耐えられず、崩れてしまった。

「ギジャ？」

「見る？これが俺の新しい力、そして新しい姿だ！」

キトは崩れた豆腐の向こうにギジャを発見したが、修行時代の面影は残っていなかった。筋骨はよりたくましさを増し、足が小さく太股が太くなっている。そして、長い尻尾を生やしている。腕は人の姿をとどめているが、体全体は虎縞を思わせる黄色と黒の毛で覆われ、顔は正しく虎のそれであった。

「虎人間……？」

キトは呟く、そしてそれは彼と唯一の兄弟子が目指した強化人間の一つの形であった。自分はまだ達していない領域に兄弟子は達していた。しかしそれは純粹に魔法の技によるものではなく、歪められた命、悪意ある力によるものである事も同時に感じた。

(それは間違っている！！！)

(何で虎なんだー！！)

キトとロッソはそれぞれ別の視点でツッコミを入れた。しかし、思っただけでお互い口に出す事はなかった。何故ならばギジャが信じられない瞬発力でキトに襲い掛かってきたからである。

「くっ！」

ロッソはすばやく懐のナイフを抜き放ち、投げつける。手ごたえがあったかは不明だが、ギジャの攻撃は軌道を逸れ、二人の背後に着地した。ギジャは四つんばいの戦闘体制を取り、猫や虎がそうするように二人の周囲を回りながら勝ち誇った声で語りだした。

「どーよキト？この力…俺はもはやひ弱な人間じゃない。ヘルハザードで力を手にいれ、人間を超えた『虎のギジャ』だ！」

(ヘルハザードだと…？)

ギジャは言葉が終わるや否や再びキトに飛びかかってきた。思いもかけない単語の登場にロッソはナイフを投げる暇もなかった。しかし、キトは身をひねり何とかギジャの牙をかわすことができた。しかし牙に衣服が引っ掛けられ、キトの着ていたローブの肩口が虎となったギジャの牙に持っていかれてしまった。

「惜しいな…あとちょっとで貴様の喉笛を切り裂いてやれたものを…」

しかし、キトの視線は破れたローブの布を取り除くためにむき出したギジャの牙に釘付けになった。

「それは……奥義書？」

「…そうだ。お前の不甲斐ない師匠がもったいぶってた奥義書だよ。今は俺の牙としてこの俺に力を与えてくれるのさ…！」

「そんな使い方をするために奥義書はあるんじゃない！」

そりゃそうだろう。そんなところにあったら読めないし。しかし、何かしらの魔力によって奥義書はギジャの牙に埋め込まれ、怪しい光を放ちだした。

「読まなくとも、この奥義書そのものが俺様に力を与えてくれるのさ！俺の牙に移植したこの奥義書は……ぶっ！」

喜悦満面であったギジャの顔面にL字型をした金属の武器が激突し、ギジャの言葉は途中で遮られた。ロッソが背中からブーメランを投げたのだ。

「ロッソ……！」

「悪いなキト。奥義書とやらは私にはよくわからない。しかし、ヘルハザードという名前を聞いてしまっただけでおとなしくしているわけにはいかないのだよ。」

こうして、ロッソとキトは共に虎のギジャに対峙する。

(つづく)

あとがき

ツンデレ出しちゃった！（挨拶）

お待たせしました第3部ですが、第2部と同様短期間でできました。

ただ第2部と比べるとカットした部分は多いような気がします。中盤までのバイオハザードだ、怖いモードは書くほうも乗っていたのですが、後半になるにつれて「早く仕上げちゃってD&D「クイーンドラゴンスクール」シリーズのリプレイとか設定を作りたいな～」というモードに入ってしまった。

まあそれはともかく、今回やりたかったのは見ての通りバイオハザード。一夜にして街全体がゾンビ溢れる街になってしまい、逃げてもらおう、と。とは言え、現在の一行の実力であれば20体位までは何とかなんとしますけれど、とにかくゾンビは数と不意打ちで勝負だからね。何も考えずゾンビと戦闘していたら、次々と援軍を出して、退路を絶って、仲間入りをさせてやるつもりでした。

実際のプレイでは、ハイドン＆ウェイクが柴田恭平＆舘ひろしの如く、「やばいじゃん、俺ら」みたいなノリで逃げてくれたので、この辺りの下りは満足。

その後メイドやジェスレン少年を連れて逃げるあたりももう少しゾンビに襲わせても良かったですが、ここまでで目的の大部分は果たされたのであまりごちゃごちゃさせる気はなかったんですけどね。メイドはとにかくジェスレン、レイフまで連れて行かれた日にゃあ、何とかして事態をうまく進めていかないとということと精一杯でしょう。

ま、ぶっちゃけマスタリングに陰りが見え始めてきたんだけどな！

それに、本当は水道局についても鍵がなくて、取りに戻らせる予定でもあったのですが、ハイドンは眠そうだしで元々のシナリオの流れに比べれば、結構はしより食らせています。実は生かされなかった設定、ストーリーが結構あるんだよねえ・・・まあ、蛇足にしかならないからいいんだけど。

あとはツンデレのシリス。ここまでキャラクターとして地球上に定着しているのであれば、出してみようと思いましたが、中々難しいね。TRPGのリアルタイムで進めていく中でツンはとにかくデレまで演じるのは、というか無理。

それにツンデレであれ、そうじゃなくても、基本的に美人、かわいい女の子をNPCとして出したとしても中身はマスターなんだから、プレイヤーだって感情移入できないわなあ・・・という根本的な問題。俺がツンデレやってもツンで必要以上に憎悪を生むだけなんだもん、やってらんねーよ！！（逆ギレ）

ま、その分は小説で晴らさせてもらう事にして、次回最終話で会いましょう。

2006/09/23